

**令和2年度宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議 情報交換会
概要**

区分・会場	仙台 TKP ガーデンシティ仙台勾当台 ホール1
開催日時	令和2年12月11日(金) 10:00~12:00, 13:30~15:30
出席市町村 (出席者数)	仙台市(17), 塩竈市(2), 多賀城市(1), 松島町(2), 利府町(2), 大和町(4), 大郷町(2) 合計30名
アドバイザー (運営委員)	東北こども福祉専門学院 副学院長 大坂 純 氏 仙台白百合女子大学 准教授 志水 田鶴子 氏 仙台市社会福祉協議会 事務局次長 高橋 健一 氏 (午後) 仙台市地域包括支援センター連絡協議会 幹事 早坂 恵美 氏 (午前) 宮城県社会福祉協議会 震災復興・地域福祉部 部長 西塚 国彦 氏
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ：新型コロナウイルス感染症の影響について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域により活動再開に温度差がある。再開, 中止と二極化している。 ○ 活動再開の方法(対策等)について自治体や包括, コーディネーター(以下Co)に相談があった。 ○ アンケートを実施し, 活動再開していないところに巡回予定。 ○ 会場の管理者の意向に左右される場面も。(開放してくれない等) ○ サロンができなくなり, 訪問型にしようという動きが出てきた。 ○ 「包括で何かやってほしい」と地域から声があがったが, 責任の所在を考えるとなかなか企画することに踏み出せない。 ○ サロン活動の内容をラジオ体操や散歩会に切り替え, 新しい活動に繋がった。 ○ 活動再開したところも, 最近また休止に至った。 ○ 活動再開に至らない大きな要因として「感染者の1号になりたくない」という思いが強いようだ。 ○ 1件1件電話で活動再開を確認。7割以上が活動休止中であった。 ○ 月2回午後開催の活動を, 午前2回, 午後2回と分けて実施。 ○ 本人は行きたいが, 家族から止められている人もいる。 ○ もともと活動に使用していた会場が狭く, 密になるため再開できない。 ○ 認知症の相談が増え, 孤独死も。見守り体制が弱くなっていると感じる。 ○ 再会できていないところへのアプローチをどうすべきか。 ○ 感染予防も必要だが, 感染者が出た時の対応を共有したい。 ○ 包括主催の介護予防教室を再開したが, 参加者は少ない状況。 ○ 足腰が弱くなった, 閉じこもりがちになった, などの状態変化が見られる方も。 ○ 家にいる時間が増えたことで, 若いころの趣味(縫物など)にチャレンジしたり, 電話で友人と話す機会が増えたなどもあるようだ。 ○ 時間をかけて作ってきた集いの場を忘れられないよう, 毎月広報誌を作成して情報を発信している。 ○ 繋がりを切らないことで, 再開がしやすくなる。 ○ マスクや消毒を窓口で配布し, 町がサロン活動を後押ししている。 ○ 保健師や包括で現場に出向いて助言。予防対策を専門家に見てもらえると, 安心して活動できる側面がある。 ○ 早いところでは5月から活動を再開している。 ○ 参加(お茶のみ)→訪問(見守り)に変わった。 ○ 責任は誰が持つのか, という話題になる。行政からの説明会があるといい。 ○ 活動がリセットされたことで, コロナ対策以外でも活動の見直しができた。

- 活動が再開されても、飲食できないことに不満が出る。
- 冬期間は活動を中止するという話も出ている。
- 名簿記入と検温を行うことで、所在が分かりやすくなった。
- 集会所を貸してくれないという状況。
- 参加者と、主催運営側の意識の違い。運営側は怖がっている様子も。
- 亡くなった人の家（空き家）を借りてカフェを行っている。
- 有償ボランティアを利用していることで、最低限繋がっている人もいる。

テーマ：協議体の運営について

- 話し合いの場がほとんど中止になっている。
- 地域で協議しているという感じは無く、目先の問題だけ話している印象。
- 町内会単位で協議の場を持った。一人ひとりの細かな意見が聞け、今まで知らなかった住民が行っていることを知ることができた。
- LINE を使用して地区ごとの協議体を実施。
- すでに協議体は設置しているが、目的を再確認し、開催方法を再検討する予定。
- 広い会場で、時間短縮、人数絞って、質疑応答は書面で行う等、工夫して開催。
- 校長先生の参加があった。
- 町内会長、民生委員、市民センター館長、包括で寄り合いとして開催。
- 地域活動に参加する際、家族の同意が必要と言われているところも。

テーマ：高齢者の移動サービスの充実について

- 生協の移動支援サービスが開始される。
- 近所、地域のネットワークが強く、お互いに足りないものを買ってきたりと、自然な支え合いができている地域もある。
- ボランティアで病院への移送サービスを行っているところがあると聞いた。
- 地域活動に乗り合いで来る方も多い。
- 交通機関があるから地域が活性化するとは限らない。無いなりに住民は工夫して暮らしている。ニーズを把握、明確にすることが大切。
- 暮らしを把握すること。実際にどのように暮らしているのか等。
- タクシー会社と契約し、月、水、金曜日に運行。料金は100円。
- 地域バスがあるが、曜日が決まっていたり若干不便。
- イオンバスを活用して銀行に行ったりしている、

その他

- ラベンダーの苗を育ててもらおうプロジェクトを実施。
- タブレット端末を配布したことで、学ぶ意欲につながった。
- コロナ禍で訪問販売が増えているようだ。
- LINE を活用した安否確認。
- Web を活用することで、地域ケア会議や研修への参加が増えている。

<p>アドバイザー よりコメント</p>	<p><志水委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 手探りながらも少しでも前に進むための工夫をしているのが分かった。誰も正解は分からないため、本日のような場で情報を持ち帰ることが必要。 ○ 協議体の進め方、包括圏域会議との棲み分けをどのように理解するか。話し合うことが必要だが、それを阻害する現在の状況。新しい生活様式を取り入れて話し合うことを継続する。 ○ 認知症の相談や孤独死が増えていることを把握されていて、それを今後どのようにコロナ禍での地域づくりに活かしていくか。 <p><高橋委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 住民は、行って良いものか悪いのかの判断など難しいのだと思うが、支援する側も同じく不安なのではないか。 ○ 予防対策は必要だが、感染者が出た際の対応策も必要。基本的には保健所の指導に従うものであるが、一段落した後のフォローも考えておくべき。 <p><早坂委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ感染症流行初期には相談件数が減少したが、現在は認知症の相談、精神疾患の方の相談が増えてきている。 ○ 東日本大震災の時も何をしていけば良いのかと考え、一旦立ち止まり地域を改めて見る機会を持てた。その頃を思い出し、今のこの時間をもっと前向きにとらえられるかもしれない。 ○ 我々支援者も孤立しないよう、みんなでスクラムを組んでこの難局を乗り越えていきたい。 <p><西塚委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍において、やがて経済的困窮や社会的孤立が重なり、自死、孤独死、社会的排除が蔓延するステージが予測される。 ○ 自助だけでは全てを解決できない。お互いが支え合ったり助け合ったりする地域づくりを、公が制度として担保し、地域住民はそれに協力していく、いわゆる住民主体を大切にしておくことが必要。 ○ 地域には協力してくれない人もいる。そこを排除するのではなく、粘り強く認め合っていく。このようなことが社会の共通の規範として成立する新しい未来をつくっていく。 <p><支え合い事務局・及川></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 活動の再開が早かったところに共通しているところは、Coや包括、民生委員、社協などが住民と一緒に話し合っているところ。 ○ 包括のCoでは、個別ケースに対して自身で把握しているお宝を活用してアプローチを行っている事例があり印象的であった。 ○ 活動再開に踏み切れないところに対して、行政担当者とCoがデータ等をもとに、繰り返し腑に落ちる説明を行っていかなければならない。 ○ 要介護・要支援認定者数の増加、虐待相談の増加等、具体的な影響が出始めているのだと改めて感じた。今後、保険者とCo等はこれらのデータをもとに地域住民に働きかけていければ良いのではないか。
<p>全体講評 大坂委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍では、医療職とどれだけ連携できるかが重要。日々変わる知見に基づいた新しい情報を医療職は持ち合わせている。それを一人でも多くの地域住民に伝え、身に着けてもらうことがリスクを減らすことに繋がる。 ○ 名取市では早い段階から地域活動の再開を後押ししてきたが、それに関連するコロナウィルス感染症の感染者は一人も出ていない。正しい知識を住民が見につけているため。

- | | |
|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none">○ 住民が集まり、情報を共有したり話し合うことで、皆がルールを守るようになる。医療コンプライアンスは確実に上がる。○ 活動を再開できないところは不安があるから。なんとなく済ませているところはリスクは高まる。促進要因と阻害要因をしっかり導き出し、戦略を立てることが重要。そのために、医療専門職との協働が必要。総合事業、生活支援体制整備事業の目的を、自分の自治体、自分の地域で明確にし共有する。 |
|--|--|

区分・会場	県南部 大河原合同庁舎 別館 2階大会議室
開催日時	令和2年12月14日(月) 10:00~12:00, 13:30~15:30
出席市町村 (出席者数)	白石市(13), 名取市(3), 角田市(4), 岩沼市(4), 蔵王町(3), セキヌメ町(2), 大河原町(7), 村田町(4), 柴田町(3), 川崎町(1), 丸森町(3), 亘理町(1), 山元町(6) 合計54名
アドバイザー (運営委員)	東北福祉大学 教授 高橋 誠一 氏 宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木 守幸 氏 宮城県サポートセンター支援事務所 コーディネーター 真壁 さおり氏 公益財団法人さわやか福祉財団 インストラクター 渡辺 典子 氏
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ：新型コロナウイルス感染症の影響について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の活動がストップしてから、高齢者も外出しなくなる。家族から外出を止められていた方も。 ○ 外で簡易テントを用いて実施している活動があった。 ○ 市で活動時のガイドラインを出し活動再開の支援をした。 ○ 活動再開を後押しするため、ガイドラインをメールや全戸配布した。集会所にもガイドラインを掲示。 ○ 会場を広くして会議や協議体等を実施。 ○ 委託元と委託先で協議体の開催について考え方が違うことも。 ○ 集いの場を運営している方に説明を行い、活動再開の支援を行った。 ○ 住民から活動再開のアドバイスを求める声があった。 ○ 病院, 町, 包括で連携して感染予防策を実施しながらサロン再開している。 ○ フレイル予防のためにガイドラインを作成, サロン再開している。 ○ 責任問題が生じるからと, 今年度の活動は一切中止されている。 ○ 感染対策についての研修会を, サロン主催者向けに行った。 ○ 集まる場が無くなり寂しいとの声があがっている。集いの場の必要性を改めて感じている。 ○ 集まることが良いことだと再認識した住民も多い。住民の意思, 意識が変わるきっかけになった。 ○ 人数制限, 時間短縮などして活動再開。 ○ 仙台市から運動の講師を呼ぶことに「怖い」と参加者の家族から声があがった。 ○ 1人でも反対者がいると再開できない。全員の意見の一致が必要なところも。 ○ 感染対策チェックリストに毎回記入してもらう。 ○ 時間を短縮したことで, 参加者から不満の声が出たことも。 ○ これを機に, 民生委員の見守りが強化された。 ○ 連絡網を作るなど, 再度自粛したときの対策を今のうちに考える。 ○ 会場の使用禁止が解かれ開放されると, 活動再開のきっかけになる。 ○ 自粛→身体能力の低下, 認知症, アルコール問題等の相談が増えている。 ○ 活動参加者が, 来ない人を気遣うようになった。 ○ 活動再開したサロンのことを口コミで知って再開が広がった。 ○ チラシを配りながら再開を後押しした。 ○ アンケートを実施。回答者へThankYouカードを返送。 ○ 各サロンに体温計と消毒があれば再開しやすいかも。 ○ 活動再開が足踏み状態であった。サロン代表者を招集し, 不安な部分を確認, 打ち合わせを行った。 ○ マスクの配布をきっかけに, 若い世代と知り合うことができた。

- イベントができなかった分、集会所の古くなった備品を買い変えた。

テーマ：協議体の運営について

- 移動の問題が必ず出てくる。
- 協議体で「お宝発表会」や「活動発表会」を開催。
- 協議体で前向きな意見が出ても、ネガティブな意見に引っ張られ消えてしまう。
- サロンを通所Bにつなげたい。
- 地域の中心になってもらえる人を見つけ出すのが難しい。
- 今年度はまだ開催していない。年明けに実施予定。
- ワイワイガヤガヤにならない。盛り上がらない。
- 行政が主催の協議体でも、テーマは委託先のCoと一緒に考えている。
- コロナ感染症の影響を懸念し活動できていないサロンと、工夫して実施しているサロン、意見の違う2つのサロンが情報共有することで、工夫や対策が可能だと気付く機会となった。
- 課題から解決に至らず、情報交換で終わってしまう。
- 話し合いの場をどのように住民主体のものとしていくか…
- 課題としてはあるが、徒歩や自転車など自分で通える範囲に集える場があれば良い。
- 開催しても次に続かない。開催することが目的になってしまっている。
- 有償ボランティアの立ち上げに至った。シルバー人材センターと競合しないように工夫して実施。

テーマ：高齢者の移動サービスの充実について

- 電話1本で移動販売に来てくれる事業所がある。
- デマンドタクシーの活用。
- デマンドタクシーは、使い勝手の面から実施していない。
- 通院の移動が大変。特に透析患者。
- 買い物バスを導入したが、利用者はあまり多くない。
- 制度が複雑で、移動支援するにもどう制度を使えばいいのか分からない。
- 訪問Dについて、そろそろ考えていきたい。
- サロン会場に移動販売車に来てもらっている取組みを実施。
- 地域が広く大変困っている。90歳を過ぎても運転している人も。
- 事前にはニーズがあったが、実際にやってみたらそれほどでも…
- 近所付き合いでも事故が怖い。
- 協議体で話題にしても「役場でなんとかして」となってしまう。
- 本当に移動支援が必要な人は、一握りかもしれない。大変な中でどう生活しているか知ることが必要。
- 町内バス利用しにくい。
- 難聴で電話ができない、歩行器が積めない、病院の帰り時間は予想できない等、デマンドタクシーは利用しにくい。
- 町民バスでは町外の通院はできない。
- 住民主体の困った時の支え合いグループ発足に向けて話し合いが進んでいる（掃除、買い物、送迎など）。
- 町内のスーパーが市と共同事業の試行を実施。スーパーが車で住民を迎えに行き、帰りも送ってくれる。
- 移動販売の方が地域の見守り機能を果たしてくれている。売れる商品の傾向や

	<p>同じものを繰り返し買う方の情報などをくれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 要望があってバスを走らせたが、利用者がいない。 ○ 障害者施設で地域貢献として実施してくれるかもしれないところがある。 ○ 足がなくてサロンに行けない→介護保険サービスの利用につながる。 ○ デマンドタクシーはあるが、家から道路まで距離がある人はそこまで行けず。 ○ タクシー会社との協議が難しい。 ○ 社会福祉法人から車両貸出の話が出たが、その後の動きに繋がっていない。 <p>テーマ：その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 通所・訪問A～Dを行うにも職員が足りない。事業が煩雑になる。 ○ 通所Aをデイ事業所内に併設、空いているところを活用。同じ場所であれば、状態が変わっても生き続けられる。 ○ この事業は、枠はあるがあとは自由度が高い。だからこの良さはあるが、まとめるのが難しい。 ○ 地域共生社会の実現と、生活支援体制整備事業の棲み分け。同じ地域づくりだが、介護保険の事業なので…等と悩む。 ○ 民児協の定例会にCoが参加し、地区で悩んでいることや見守り体制について話し合っている。 ○ 地域ケア会議にCoが参加し、マッチングに至った例もあった。 ○ ボランティアが減少している。やりたいことと、依頼のギャップ。 ○ 1層Coと2層Coの役割が曖昧になっている状況。 ○ 訪問介護事業所が地域に無い。生活支援サービスを整えたい。 ○ 社協内にギャラリースペースを作り、手仕事の成果物を展示。
<p>アドバイザー よりコメント</p>	<p><鈴木委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今まで皆で高齢者の居場所づくりを一生懸命進めてきた。不要不急の活動は自粛すべきと言われるが、地域住民の活動は不要不急の活動なのか？そういわれたら何のために今まで頑張ってきたのか分からなくなる。活動に関わる人たちも含めて、一人ひとりにとって大事な活動であるため、今できる対策を講じて実施していくべきではないか。 ○ この事業をとおして、住民が力をつけ、自分たちで自分の地域を考えてもらう。活動を再開するにも自分たちで考えながら、良い方法を選択して実施していく。皆が一人で抱えなくて良い、住民と一緒に悩み苦しんでいくこと。 ○ 高齢者の虐待も増えている。しっかりアウトリーチを図って関わりを持っていくこと。 <p><眞壁委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 4月～6月頃の一律の活動休止を経て、どのように対策をすれば活動を実施できるか、と住民の気持ちに変化が見られてきている。住民側から相談されるケースも多いようだ。 ○ 行政側はどうしても慎重にならざるを得ない。そこに住民の声をどう届け反映させられるかをCoは担っている。 <p><渡辺委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍をポジティブに捉えていこうという思いが伝わった。 ○ 集いの場が住民にとっていかに介護予防や役割を持って生活することに繋がっているか改めて気づき、再開したいという住民の声をCoがキャッチし、安心して活動できる策を一緒に考え、関係機関皆で工夫して取り組んでいる。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 以前のおりとはいかないまでも、周りの人を気に掛け合う取り組みを再開できている。形は変わっても思いは変わっていない。 ○ 関係機関の繋がりがあって今回のコロナ禍を乗り越えることができる。
<p>全体講評 高橋副委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今日話を聞いていて、思っていた以上に活動等の再開に取り組んでいることが分かった。コロナ禍だからこそ外に出て地域を見ることで、今まで見えなかったものが見えることもある。 ○ お互いに納得できるところで進められれば良い。ある人は積極的で、またある人は慎重であっても良い。コロナウィルス感染症は見えないもの。お互いに納得できるまでのプロセスが大切。 ○ 今できることをしていかないと、コロナウィルス感染症が収束しても何もできない。 ○ 問題が起こったら抽出するのは簡単だが、起こらない問題を地域課題として抽出しづらいもの。仮想、想像して起こり得ることを話し合っていくことが必要。 ○ 地域によって事情は違うと思うが、他地域の情報を得ながら進めてほしい。こんな時だからこそ情報交換が大切になってくる。

圏域・会場	県北部 サンシャイン佐沼 鳳凰の間
開催日時	令和2年12月16日(水) 10:00~12:00, 13:30~15:30
出席市町村 (出席者数)	石巻市(8), 登米市(11), 栗原市(4), 東松島市(4), 大崎市(4) 涌谷町(1), 女川町(4), 南三陸町(3) 合計39名
アドバイザー (運営委員)	東北福祉大学 教授 高橋 誠一 氏 宮城県サポートセンター支援事務所 コーディネーター 真壁 さおり氏 涌谷町社会福祉協議会 地域福祉課長 柴 明 氏 宮城県社会福祉協議会 震災復興・地域福祉部長 西塚 国彦 氏
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ：新型コロナウイルス感染症の影響について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 活動再開の支援として、アルコールの配布等を行った。 ○ 会食などをやめられないところもあった。 ○ 何かあったら、と心配して再開できないところ、参加できない人がいる。 ○ リーダー同士の情報交換の場づくりも必要。 ○ 今後の活動に活かせるよう、個別の訪問で地域を見守り、ヒアリングしている。 ○ いまだ活動の縮小、休止が続いている。 ○ 自宅でできる活動を促進している。 ○ 清掃活動のサロンがマスクづくりも始めた。 ○ 最近また中止になったところも多い。 ○ 家族の反対があり活動に参加できない方もいた。 ○ 外でラジオ体操を始めたが、人が集まらず悩んでいるところがある。 ○ 注意すべき点をまとめ、訪問して配布。 ○ 主催が行政、社協であれば来てもらえる。 ○ 虐待、介護認定者数、認知症相談が増えているとの話を聞いた。 ○ 集うことの大切さに気付いたと、住民から話あり。 ○ 活動に受け身であった人が、自分からやってみようと思う人が出てきた。 ○ リスク管理、捉えかたはそれぞれで、休止、再開もそれぞれ。 ○ 行政に対応、方針を相談しながら、感染予防の啓蒙、普及を図っている。 ○ 再開し活動が活発になってきたところで、再度休止に至った。 ○ 再開の声がけをしたが断られる。 ○ 感染者が出たことで、行政から「再開しましょう」とは言いにくい部分も。 ○ 自分たちで再開を決めたところは自己責任の思いで実施している。 ○ 行政主催の行事には多くの住民が集まった。 ○ 自宅でできるキルトづくりを行い、完成したものを集めて一つの暖簾を作成。 ○ 「四つ葉のクローバー幸せ探し隊」を結成。集めたクローバーでしおりを作成し、住民へお返ししている。 ○ サロンを自粛し、できることをやろうと「見守り、声かけ」を行っている。 ○ 講演会を開催し、講師に活動の後押しをしてもらった。 ○ 活動代表者→中止したい、参加者→やってほしい、その板挟みになっている。 ○ 他団体の活動状況などを参考に伝えている。 <p>テーマ：協議体の運営について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1層と2層が連動していない。 ○ 1層が機能していない、と2層から話があがる。 ○ 移動の問題など意見が出て、出て終わりになってしまう。 ○ 個別支援と地域支援の連動性がない。

- 2層協議体を2回に分けて行っている。
- 隣接する地区での情報交換を目的にしていたが、今後は若い世代を絡めて支え合いの地域づくりを啓発していく。
- 地域を組織化，賛同したコアメンバー，地域福祉委員を活用，まち協と協働，といった4つの形でそれぞれ協議体を開催。
- 地域性で差があり，何をさせられるのか等の意見が出る地区もある。
- 今年からイオンに協議体参加してもらっている。
- 長く協議できる場をつくりたい。
- 包括圏域，学区割り，民協単位などの地区割が様々あるため難しい。
- Coと協議体，包括との連動が必要。
- 協議体で，介護事業所や商店の方々と感染症対策の勉強会を行った。
- 協議体委員で住民バスに乗ってみて，不自由なところの発見，改善を求めた。
- 1層と2層との繋がりを持てるよう，テーマを同じに設定した。
- 協議体で，買い物支援の具体策に繋がる話し合いをもてた。
- 協議体とは何か，何を目指すのかを理解してもらうことに悩んでいる。
- 区長に了解をもらったうえで設置しないといけないなど，地域のルールがある。地域のルールややり方，現状を知ることが必要。
- 協議体を立ち上げたものの，何をテーマに進めたらよいか，地域の中で協議体をどう位置付けるか…
- コロナ感染症の影響で今年の計画ができなくなり，振り出しに戻つつある。
- 包括持っている情報（事業対象者，要支援者のサービス利用状況，困りごと等）を，Coと共有。インフォーマルで解決できないか検討した。
- 住民は支え合いの必要性は理解しているが，一步進むのが難しい。
- メンバーが多くてまとまらない。
- 地域の困りごと，公民館の課題，防災等について話し合いを行っている。
- 雪かきの困りごとには，年契約で500世帯に支援を行っている。

テーマ：高齢者の移動サービスの充実について

- 合併前の旧町村単位であれば動きやすい。
- 検討が必要な地区もあるが，誰がやるのか…となりそこから進まない。
- 協議体でやってみようという意見が出て，移送サービスが始まった。多い時で日に9～10回送迎依頼あり。月2回までの縛りがあるが，足りないとの意見も。
- デマンド型も始まったが，利用率が悪い。
- 高台移転によって，バス停まで遠くなったとの声あり。
- 地域の移動販売の情報を収集している段階。
- カーシェアリング協会が実施している活動として，片道500円で買い物や銭湯に送迎する。ボランティアが運転。
- ニーズは増えており，協議体でも話し合った。
- 1月から無料バスが開始される。老人クラブに入会していることが利用条件。
- メーカーの協力のもと，シニアカーの試乗会を行った。
- 免許返納のその後を考えなければいけない。
- 街の中心部でないとタクシーが来てくれないところもある。

テーマ：その他

- 包括とCoの繋がりが必要。
- ワカメの種付けを高齢者がアルバイトで担っている。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ Coがどのように地域に介入できるかを住民に示すツールを作りたい。 ○ 地域ケア会議に参加しているが、地域課題の抽出までは至っていない。 ○ 地域のすべてを知ろうとすると大変。まずは味方を見つけて情報を集めるようにしている。 ○ Coの定着が課題。 ○ 事業の評価をどうするか。 ○ 地域資源を集約した情報の活用方法、外部への発信をどうするか。 ○ 個別支援と地域支援の連働が難しい。
アドバイザー よりコメント	<p><柴委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コロナウィルス感染症の状況が来年度になったからと劇的に変化することは無いかと考えている。Coも住民も皆様々なジレンマを抱えているはずで、住民との話し合いを重ねて少しずつでも前に進めていきたい。 <p><真壁委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生活支援体制整備事業が始まってから、試行錯誤を重ねて悩みながら活動してきたと思うが、一つ一つ取り組みを進めていくことで、少しずつ手応えも生まれてきているのではないか。 ○ 生活支援体制整備事業について悩んだ時の日常的な相談先として、支え合い事務局に声を掛けてみてほしい。 <p><西塚委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍だから家に籠るのか、リスクはあっても外に出て活動するのか、の二者択一を迫られてきたが、安全に地域で支え合いながら活動をしていくという選択もあるはずである。 ○ いつも自助が叶うということはない。公に頼るだけではなく、地域での支え合いの仕組みを地道に作っていく。否定的な住民たちも排除せず、豊かな地域づくりに寄与していきたい。
全体講評 高橋副委員長	<ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍でできないことが多くある状況だが、できることをすると新たな気付きに繋がる。工夫する力、繋がる力がベースにあれば多くのことを生み出せる。 ○ 情報交換会で改めて他の情報を得ることができたと思う。地域の中でも情報交換をすることで地域づくりが進む。様々なやり方を共有することはコロナ禍では重要となってくる。 ○ 地域包括ケアシステムを構築するには行政だけではできない、地域住民と一緒に取り組まなければならない。 ○ 介護予防は専門職が働きかける運動だけではうまくいかない。その場で繋がりをつくり、支え合いながら続けることが必要。少し不安な状態になると、ひとりで頑張ることは難しくなる。支え合える地域づくりがベースとなって、介護予防や集いの場、社会的孤立の問題等にも繋がっていくもの。 ○ 県北部は広域合併が多いので、旧町村などの単位で取り組むことが必要になってくる。